
MOUNTAIN

ヒルトウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOUNTAIN

【Nコード】

N7931T

【作者名】

ヒルトウス

【あらすじ】

登山家サークルに所属する主人公は、山に魅せられた人間の一人だった。

彼の山との戦いが始まるうとしていた……。

この作品はフィクションです。この作品に登場する団体、人物などは架空であり、実在の団体、人物とは一切関係ありません。しかし、地名や山などは実在のものを用いています。

山岳（前書き）

頑張って書きました。

なんか長続きしそうです。

皆様に読んでもらえるよう、頑張ります。

山岳

山は、大きくて雄大で、神秘的で、人々から崇められた地であった。

その証拠に、ギリシャ神話の中心地はオリンポス山だし、山岳信仰の地やパワースポットとしても有名であったりする。

そして、名高い山ほど人々は魅せられる。それは今日の富士山やエヴェレスト山の登山者の量が証明している。

しかし、それは同時に、美しきこの山々を、汚してしまう。

これは、そんな美しき山々に魅せられた登山家の物語である。

2011年某日。

朝七時に目を覚ましたXは、^{エックスレイ}外の空気を吸った後、荷造りを始めた。

今日は大阪府豊能郡能勢町と京都府南丹市にまたがる山、『深山』を登山する日だ。この山は、標高が790・5メートルもあり、大阪50山のひとつとなっている。

きちんと整理して、水分、昼食、救急キット、その他非常用グッズなど……をリュックサックに詰め込んだ。

そしてマウンテンバイクに乗り、街中を疾走する。

待ち合わせ場所についたXは、マウンテンバイクから飛び降り、カギをしっかりとかけた後で歩き始めた。集合場所はいつものカフェ。やはりまだ来ていない。そこでXは、コーヒーを一杯頼んだ。

「あ、コーヒー一杯お願いします。で……ミルクと砂糖を多めで」「はい、かしこまりました」

Xはコーヒーが来るまでの間、コツコツとテーブルをたたきながら考え事をしていた。遅いな、とかなんとかかかんとか。

コーヒーが来た。彼はカップに手を伸ばし、コーヒーをすすった。

そして朝食がてら、ケーキを一つ頼んだ。

「チーズケーキを」

「以上でよろしいですか？」

「……」

「あの、お客様……」

「え？ は、はい」

Xはぼうつとしていた。

それから2分後ぐらいに二人の人間がやってきた。それぞれFとZだ。^{スール}

Fは席に座ると、

「ごめん、遅くなって」

と謝罪した。

Zは口を開き、

「ああ、すまない」

と謝罪した。

「いいんだよ。それより、深山は登れるよな？」

Xは聞いた。

「ああ。小学生が何人もいても登れる山だ。山頂には雨量観測所もある。大抵の人が登れる山だ」

Fは言った。

「そうか、なら大丈夫だな。そろそろ出ないか？ 夕食までには帰らないと」

Xは立ち上がった。コーヒーとケーキの代金を支払い、出口へと向かう。

彼らは登山家サークル『^{エターナル・ジェネレーション}永遠の世代』だ。年に一度開かれる『登山家総会』ではシヨボいサークルとしてさげすまれている。

「永遠どころかあと二か月で消えるんじゃないか？」

周りからはそういう目で見られていた。

場所は深山付近。

彼らは山に足を一步踏み出した。

しかし、彼らは知らなかった。

自然の猛威を。

自然の強さを。

自然は人間を超えろということ。

山岳（後書き）

まだ全然話が進んでいませんが、これから書き進めるつもりです。
頑張ります。

猛威（前書き）

二回目となりました。
頑張らせていただきます。

猛威

エックストラオックストロット

XはFの後ろに続いて、足場の悪いルートを登っていた。何でわざわざ大変な方を登るのかは知らなかった。

「なんでしんどい方を登るんだ？」

Xはついに聞いた。

「こっちのほうが楽しいだろ」

Fが答えにならない答えを返す。

「それじゃ答えになつてないんだよ」

Zが突っ込みを入れた。

「だって、何となくだし」

「……」

Fの適当なプランに、XとZはつくづくあきれた。

ZはGPSみたいなのを使い、今の位置を教えてくれる。ちなみに、現時点では200メートル分しか登っていない。

「あと590メートルもあるのかヨ……」

Xは愚痴をこぼした。

Fは速く速く登っている。

XとZはとてもじゃないがついていけない。

「もうちょつと速度落とせよ」

Xは文句を言った。

「ちゃんと鍛えたんだから大丈夫だ」

Fはまだまだ歩いていく。

「昼食もとらないのか？」

Zは聞いた。

「今12時過ぎだけど」

Zは補足した。

「疲れてから食べたほうがいいだろ。それに、今こんなところで食べ

ねえぞ。もうちよつとぐらい待てよ。12時半には食べよう」
Fは返答した。

12時半。

XとZ、Fは休憩できそうなところに腰を下ろした。

Xは昼食をリュックサクから出した。

Fは基本腕白だから、本当は食べたくてうずうずしていたらしい。
弁当箱を開けたとたんに、すごいスピードで食べ始めた。

「もうちよつとよく噛めよ」

Zがあきれて言った。

「時間の無駄。お前らも早く食べ」

Fはしっかりした声で返した。

20分後。

Xは弁当箱をしまつと、立ち上がった。

Fはもうウォームアップを済ませていて、XとZを待っていた。

二人は軽く体操をして、Fのもとに駆け寄った。

「行こうか」

Fは言った。

が。

二人の視界から、突然Fが消えた。

「うわあああああ！」

Fは落ちた。彼らのいたところは岩がせり出しているところで、

その石が抜けたのだ。

「痛え」

Fはこぼした。

XとZは駆け寄ろうとした。

しかし……。

ドオン。

という音とともに、木が倒れてきた。幸い、あまり大きくはなかつたため、三人は無事だった。

「これから先、こんなことがたくさん起きるんだな」

Fを引き上げてから、Zは言った。

彼らはずくづく実感していた。

自然は怖いものだ。

決して油断してはいけないと。

猛威（後書き）

次はどうしようかと思っています。なかなか次のこと考えながら書くのって難しいですね。

山頂（前書き）

三回目です。

今日も彼らの登山は続きます。

山頂

さっきの出来事に驚きつつも、X、F、Zは山を登っていた。い
つだったか雨が降ったので、足を滑らせてこけそうに（何度も）な
ったが、見事なチームワークで着実に距離を稼ぐ（といってもそれ
ほどの距離はなかったが）。

Xは重い足取りで登っていく。Fは考え事をしながら木の枝をつ
かんで登る。Zは携帯（GPS機能搭載のタブレット端末だ）の画
面を見ながら登る。

「もう天気も悪いし、登りきったら車で帰らね？」

Zは提案した。

「車って誰の？」

とFは苦笑しながら聞いた。

「俺のさ。大学を一発で合格、進学、卒業までしたから、買っても
らった」

Zは自慢げに言う。

「金持ちはいいよなあ」

Xは笑いながら言った。

「俺の叔父さんに車乗ってきてもらってさ、乗って帰る」

Zは続ける。

「叔父さんも一緒に、だよな」

「もちろん、という返答を期待してFは聞いた。

「当たり前だろ」

Fはほっとした。たまにZは恐ろしいことを言うのだ。

彼らは赤いオープンカーの中、しゃべりながら帰った。深山の頂
から望む絶景、底が一直線になった雲。

何をとっても美しかった。

Xは次の日、腰を痛めた。

腰痛は恐ろしかった。

次回のサブタイトルは”腰痛”だろう。

山頂（後書き）

ちょっと短めです。まあ息抜きで。
本当に次のサブタイトルは”腰痛”にしようかな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7931t/>

MOUNTAIN

2011年6月8日22時41分発行